

# 西藏傳安慧造・唯識三十論疏

(第五卷、第三  
第四號、前承)

寺 本 婉 雅 譯

は し が ゃ

本篇は本誌第五卷第三、第四號に掲載せし「安慧造・唯識三十論疏」の後篇和譯である。本篇和譯は梵本(シルブツ、レザー氏刊本)と對校して和譯するを得たるも、前篇和譯の際には未だその好機に接することが出来なかつた爲め、所々訂正を要すべき箇所も存することであるがそれは後日期を得て改訂し、更に發表することとせん、讀者之を諒せられよ。

## 第 二 章

此次に於ける説明は諸の隨煩惱を詳釋せんが爲めなり。

(13) 「忿と、恨と、

覆と、惱と、嫉と、

慳と、諂と共なる」と。

|| Khro Dan Khon-Du hDsin-pa Dan |

| hChab Dan hTshig Dan Phag-Dog Dan |

| Ser-Sua Dan-Ni Sgyur bcas-Dan ||

(14) 「誑と、憍と、害と、無慚と、

|| gYo Rgyags Rnan-hTshe No-Tsha-Med |

無愧と、惛沈と、悼擧と、

| Khrel-Med Rnags Dan Rgod-Pa-Dan |

不信と、解怠と、

| Ma-Dad-Pa Dan Le-Lo Day |

放逸と、失念と、

| Bag-Ma-Pa Dan brjed-Nes Dan |

散亂と、不正知と、

| Rnam-g-Yen Ces-b-Shin Ma-Yin Dan |

悔と、睡眠とは亦是の如く、

| hGyod Dan gNis Kyari De-b-Shin-Te |

尋と、伺となり、

| Rtog-Pa Dan-Ni dPyod-Pa Dan |

隨煩惱は二と二種なり」。

| Ne-Bahi Non-Mons gNis Rnam-gNis ||

と言へるを説明せん」とす。(以下原本)。

そこに忿 (Krodha, Khro-Ba) とは直ちに害せしむることに住し、全ての心より責めらるゝ所有  
思なり、これまた全てより責めらる心の自性なれば、瞋恚 (Pratigha, Khon-Khro-Ba) と異ならざ  
れど、是は瞋恚の時間の差に於て施設せらるゝが故に、瞋恚の(一)分に屬し、直ちに害せしむるこ  
とに住止して、有情と非情との境に於て全ての心によりて責めらるゝ思なり。切斷に由て斯等の依  
止たらしむる所有の業あり、それを忿と假名するなり。

恨 (Dpanaha, Khon-Du hDsin-Pa) とは結を執持す(るを性)す。忿に次で是に由て「我」を害  
せられたりとして結を持する我性の起る場合を捨てず、絶へず生するは恨なり。これは不耐忍を依

止とする業を有す。不耐忍とは害せしむることに於て、云何なるかを思惟せず、爲すべからざる道に害せしめんと欲すと云へる名稱なり。これまた忿の如く瞋恚の時間の差に於て施設せらる。この故に施設の存在を知るべきなり。

覆 (Mraksah, hChab-Pa) とは自己の罪を隠蔽する(の意)なり。欲と瞋恚と怖畏等を除く。そこに利欲の談話を作りて、時に汝は是の如きを爲すべしと教へば、愚癡の(一)分に屬す、罪の隠蔽は覆なり。覆は愚癡の(一)分に屬し、隠蔽の相あればなり。これ悔(又は惡作)と觸とに住せざる依止の業を有す。これ法性なり、かの罪を隠蔽せば悔となるべし。悔 (Kaukritam, hGyod-Pa) は必ず意の不安と想應するが故に、觸には住せず。

惱 (Pradāca, hTshig-Pa) とは鹿言を以て瞋恚を投することなり。鹿語 (Tshig-bRahi-Po) とは、秘密を掘き出す性傾によりて注意を失ふことは(即ち)鹿語なり。瞋を投せしむる性傾に(由ること)は(これ瞋投にして、かの實體は投瞋なり。鹿語に由つて斷滅に等しく、投瞋によりて鹿語するは投瞋なり。これまた忿と恨とを先行とする心の總てより責めらるゝ心の本性なるが故に瞋恚の(一)分に屬し、實質に於ける存在にあらず。これ口(業)の罪行を發起せしむる業を有し、觸に住せざる業を有し、其等を有する人と支とには困難なればなり。

嫉 (Irsyā, Phrag-Dog) とは、他(人)の幸福に對して内心を動搖せしめ、所得と名榮とを餘分に

貪り、他の收獲と、名譽と、種族と、持戒と聞等の功德の勝れたるを聞き、瞋恚の(一)分に屬し、不能忍の心の内より動搖するは(即ち)嫉なり。自己の位置に於て特に動搖し、内より動搖し、不安の意と相應し、それに先行するが故に觸には住せず、不安意と、觸とに住せざる業を有すと云ふべきなり。

慳 (Māryā, Śrī-Snā) とは、布施と相應せざる心を以て一切を持す(の意)なり。持する物と法と、資糧とにして諸の伶俐の主は供養と利益とを欲するが故に、欲と無欲とに適合して布施を行ふは、是れ布施なり。かの(欲)あれば無施となるが故に、かの(布施)とは不相應なりと云ふべきなり。收獲と名譽とを餘りに貪るが故に諸の害資に於て貪欲の(一)部に屬する一切心を持し、全てを捨てざる欲は(是れ)慳なり。そは資材を減少せしめざる業を有す。「資材を減少せしめず」とは、慳に由て諸不必要なる資材さへも尙畜積することを知るべきなり。

諂 (Māya, Sgyu) とは、他を欺むきて不正の意義を教示すとなり。收獲と名譽とを餘分に貪り、他を欺く心を以て持戒等の異義に住して他に教示し、これは貪欲と愚癡とを集めて不正の功德を教示するが故に、この二集を假説せり。忿等の如く假設なるも實質に於ては無し、邪命の依止たらしむるを業を有す。

誑 (Cātīya, gYo) とは自己の罪と共なる方便を執(設)して隱藏する心なり。「自己の罪と共なる

方便」とは、他人の頭を惑はしむることにして、そは又他より他に轉ずること、風評、謗語と、明かに作さざることとなり、この故に誑と覆との二は差異あり、かの(覆)は明かに陰蔽せしむとも方(便)のにはあらず。そは收獲と名譽とを餘分に貪りて、かの貪欲と愚癡との二を以て自己の罪と共に(陰蔽せんが)爲めに(以下原本一八七左)。他頭を惑はしむるに由て、かの二集に於てこれを假設せり。これ如實の訓誨を得べき故障の業を有す。如實の訓誨とは、かの(訓誨)を得れば(誑は)理趣に従ひて作意(念)せしむるに、そは故障を作るなり。

憍 (Mada, Rgyas-Pa) とは、自己が幸榮を貪りて能く歡び、心を總て持するの(意)なり。種族と無病と、若齡と、力と、形色と、富と、慧と、空想等の最勝となる(これ)自己の幸榮なり。能く歡ぶとは、歡びの特殊のものなり、かの歡びの特殊に由て自心の力なきも、それを以て彼等の力たらしむるが故に、總てを持するなり。この故に心を總て持するとは言ふなり。これ一切の煩惱と隨煩惱との依止たらしむる業を有す。

害 (Vihimsā, Rnan-Par kTishe-Pa) とは、諸有情を傷害することなり。(そは)殺害と捕縛と、打撃と、瞰視などの種々などの種々を以て諸有情を害することなり。これに由て殺害と捕縛などを以て諸有情を傷害すれば、苦惱と不安とを發起せしむるが故に、諸有情を傷害すと(云ふ)なり。そは瞋恚の(一)分に屬し、諸有情に對して、無慈悲にして心暴なり、諸有情を傷害するの業を有すと

は、諸有情を害すること云ふべきなり。

無慚 (Ahi, No-Tsha Med-Pa) とは、罪を由て自から憚らざることなり。かの業は自己の部分に (屬せざるを) 知に従ひて、なほ總ての罪を耻ざるは、これ無慚なり、(以下原本 一八八右)

無愧 (Atrapa, Khrel-Med-Pa) とは、罪に由て他に憚らざることなり。これ世間と論とは不相應なることを自から作れる所以を理解すれども、尙罪を作りて憚らざるはこれ愧の存する不相應の行となるべし(これ即ち)無愧なり。この二は煩惱と、一切隨煩惱との扶助たらしむる業を有す。貪欲、瞋恚、愚癡の一切惡行を生ずる因に於て應さに相應するものに假托し、貪欲、瞋恚とは俱生せればなり。自の因はなきなり。

惛沈 (Styana, Rmugs-Pa) とは心業に於て正しからず、鈍性なり。鈍の體は鈍性なり、それを具するが故に心は愚となり、鈍となるべし、(そは)所縁を分別するに堪へざるなり。これ一切煩惱と隨煩惱との扶助たらしむる業を有し、愚癡の(一)分に屬するが故に、愚癡の(一)分に屬すれども、離れては無きなり。

(註) ①鈍性——原文には Shi-Ba-Nid (起る又は高まる性)とあり、又 Yiniatova の著「唯識三十論疏」(Ku. CV. XI. p. 43b) には Shi-Ba-Nid (受くる又は取る)とあり、之れ恐らく Blad-Pa (鈍き)の誤寫なるべし。

掉舉 (Uddhavañ, Rgod-Pa) とは、心をして全く寂靜ならざらしむることなり。寂靜とは寂靜處

なり。そは貪欲と相應し、粗野と嬉悅と頂位とを追念し、心をして寂靜ならざらしむる原因にして寂靜處に對する故障の業を有す。

不信 (Agradhyā, Ma-Da-Pa) とは、業と果と諦と三寶とを現かに信せず、信不相應の性なり。信とは有と徳と能とに於て現かに信するに名附けしなり。(以下原本)。(一八九右) これは貪欲を離る故障の業を有す。

(註) 有 (Yod-pa)………漢譯實。

懈怠 (Kansidyā, Le-Lo) とは、善を心に悦ばざることなり。睡眠と享樂と遊戯の和樂に依止し、愚癡の部に屬するが故に、身口意の善業を心に悦ばざることなり。

放逸 (Pramāda, Bag-Med-Pa) とは、貪と、瞋と、癡と、懈怠等に依て貪・瞋・癡等より心を護らす。かの幫助となりて善を修せず、貪と、瞋と、癡と、懈怠等に於て注意なきに假りに名附けしなり。これ不善を増長し、善を減少せしむる依止となる業を有す。

失念 (Musita-smṛti, Rjed-Naṣ-Pa) とは、煩惱を有する念なり。煩惱を有するとは煩惱と相應を有するとなり。これは散亂の依止となる業を有す。

散亂 (Vikṣepa, Rnam-Par gYen-Ba) とは、貪と、瞋と、癡との(一)分に屬し、心を分散することなり。これに由て心を種々分散せしむるが故に散亂なり。貪と瞋と癡等に由て三昧の所縁より外界

へ散亂せしむるが故に、應さにそれ等に相應じて散亂と假名せしなり。これは貪欲を離る故障の業を有す。(原文以下)。(一八九右)。

(註) ②、③、④の三ヶ處の原文は缺文となれり、之に由て多田等觀君を煩はし、東北帝國大學藏本徳格版、丹珠爾部 *Op. p. 161.* より補充することを得た。茲に君の厚意に對し深く謝意を表す。

不正知 (*Asampajanya, Ces-Shin Ma-Yeh-Pa*) とは煩惱と相應する智慧にして、それに由て去來等に付て身口意の所行を知らずして轉入し、所作と非所作とを知らざるが故に、墮落の依止たらしむる業を有す。

悔 (*Kankiya, kGyod-Pa*) とは、意に了解せしむることなり。非難せらるも後悔することなり。その體は悔なり。これは惡行の境に對し心は悦ばず、心所の場合なるが故に悔と云ふなり。これ心住の故障の業を有す。

睡眠 (*Middha, sNid*) とは、隨轉に自在なき心集合なり。「隨轉」とは所縁に轉入することなり。そはまた心の不自在より生ずるものなり、又持身する能はざるは、(これ)心の轉入に自在なきより生ずるものなり、心の集合とは眼根等の門より轉入せざることなり。そは癡の分に屬するが故に、癡の分なりと假托し、所作を失ふ依止たらしむる業を有す。

尋 (*Vitarika, Rtog-Pa* 分別) とは、一切を求むる心中の説明にして、智慧と心差別となり。一切



を求むとは、云何なるものなるやを尋求(分別)する設定なり。意中の説明とは、意の説明にして、説明(又は稱讚)に等しきなり。説明とは意義の稱讚なり。思と慧の差別と云へるに付て、思とは總ての心を一切に動搖せしむる體性(我性)なるが故に、慧とは徳と罪とを分別する相にして、かの方に由て心は隨轉するが故に、屢々心と思とに於て尋を假托せり。屢々とは慧と思とに假名し、不尋(無分別)と尋(分別)の時と次第するが如し。復思と慧との二のみに尋(分別)を假設し、その力の心が是の如く隨轉すればなり。そは粗心なり、粗と云ふは盲目にして、唯體を尋求すること粗なればなり。この理趣は又伺に於て見るべきなり。

伺 (Vicāra, dPyod-Pa) とは、思と慧の差別の體性なり。觀察の意に由てかの説明(稱讚)を先きに了解するが故に是れなりと分別(伺)すればなり。この故に寂靜心と云ふべきなり。かの二とは、觸と處と解不住との依止たらしむる業を有す。この二とは、粗と寂靜とに住するが故に差別的に區別すとなり。

「[一]と二種なり」(Dvaye dvidhā, gNis Rnam-gNis) と云ふは、二とは第二の二種の(意)なり、其等は悔と眠との二と。尋と伺との二となり。かの法の如しとは、二種の意にして煩惱と非煩惱となり。そこに不善を作さずして、善を作すが故に、若し不善心のものあれば、そは悔は煩惱を有す、若し善を作さずして、不善を作すが故に、かの悔は煩惱を有するに非ず。睡眠も亦煩惱を有す

る心に由て引かれ、煩惱を有する心と相應すとは、(これ) 煩惱を有するものなり。煩惱を有せざる心に由て引かれ、煩惱を有せざる心と相應するとは、(これ) 煩惱を有せざるものなり。欲と害心と害との尋は煩惱を有するものなり。現起等のに於ける尋は煩惱を有せざるものなり。是の如く他を害せしむる伺の方便は煩惱を有し、他を饒益する伺の方便は煩惱を有せず。そこに悔と眠と尋と伺との煩惱を有する彼等は具煩惱にして、他のものに於ては有らず。そこに應に色と聲等を縁すに(原文三十頌 第九參照)

「六種と諸(遍)行と諸決定差別と、

諸善と、諸煩惱と、諸隨煩惱と、

一切心所の中よりの品類と(以下原文 一九〇右)

相應とを有し、是の如く三受あり」。

樂受と、苦樂と、非苦非樂受となり。諸受は三受と相應す。そは樂意と苦意と捨との任の色等より生ずればなり。又善と不善と無記とを有すなり。

阿賴耶識は五遍行のみと相應す、他の諸とは(相應)せず(原文第四 頌參照)。

「そこに捨受あり、

（それは）無覆に於ける無記なり」。

煩惱を有する意とは、五遍行と我に於ける惑等は「四煩惱と常に相應す」（原文第六）そは又捨受にして無覆無記なり、今は是を考ふべし（以下原文）（一九〇左）。

云何に眼識等の五は俱（起）に於ける縁（*Alambana, dMigs-Pa*）を會合し、（その時）また阿頼耶識より一（識）のみを發生すれども、二と多とは（發生）せず。應に或考へに（よれ）ば、俱起には二と多とにはあらず、そは直接の縁（關係）なきが故に一識のみ生ずべし、一識に由て、かの多（識）の直接の縁（關係）を作る能はずと思惟するが如きものあり、併し（そは）決定してなし。若し一の縁（關係）と會合せば、一（識）のみを發生するが故に、是の如く二が第一の縁と會合せば、又二と多とを生ずべしと思惟す。

(15) 「諸五（識）は根本識より（生ず）

|| *Lha-Rnamis Ktsa-Bahi Rnam-Ces-Las* |

云何なるものゝ縁より生ずることも

| *Ti-Lahi Rkyen-Las Byuh-Bar-Ni* |

識は俱、或は不俱なり、

| *Rnam-Ces Lhan-Cig Gam-Ma-Yin* |

水に於ける諸波の如し」。

| *Chu-La Rlabs-Rnamis Ti-bShin-No* ||

と云へるを説くべし。

諸五(識) (Pancānam, Lha-Rnam) とは、眼等の諸識なり。彼の隨行する識と共なる諸のものなり。「諸五(識)の種子の住處なるが故に、それを發生し、諸趣に生を取るが故に、阿賴耶識 (Ālaya-Vijñānam, Kun-gshi Rnam-Par Ces-Pa) を根本の識 (Mūla-Vijñānam, Rtsa-Bahi Rnam-Par-Ces-Pa) と名けらるべし。

「云何なる如きものノ縁より」 (Yathā-pratyayam utbhavah, Je-Itahi Rkyen-Las) とは、何の縁と會合して、彼と彼とは決定して發生するなり。「發生也」 (Utbhavah, kByun-Ba) とは我 (bDag) を得ざることをなり。

「俱或は不俱なり」 (Saha na Vā, Lhan-Cig Gan Ma-Yin) とは俱(起)か或は次第に由るとなり。

「水に於ける諸波の如し」 (Tarāṅgānaṁ Yathā Jale, Chu-La Rlabs-Rnam Je-bShin-No) とは、阿賴耶識よりして轉入する識は俱(起)に於てか、或は不俱に於て生ずるとの譬喩なり。是の如く (以下原本)。  
 (一九一右)

「廣慧 (Vicālanati, Blo-Gros Yais-Ba) 譬へば河水の流 (Vaha, Rgyun) れども、若し一  
 波を發生する緣 (Pratyaya, Rkyen, 條件・關係) に隨住せば一波を生ず。若しは二、若しは三、若しは  
 多を生ずる緣に隨住せば、また多波を生ず、河水の流は間斷せざるが故に、全て盡きて現はれず  
 ども、是の如く廣慧よ、かの波の河の住處の如く、阿賴耶識に於て一切は依止しつゝ住するによ

る。若し眼識は獨り發生する緣に隨住せば、眼識は獨り發生す。若は二識、若は三・五識を發生する緣に隨住せば、また若は二、若は三・五に至るまで發生すべし」(解深密經の文、參照、p. 33.)  
と説かれたるが如きもの(是れ)なり。ここに偈あり。曰。

「阿陀那識は深くして微細なり、

一切種子は河の如く下る、

我を分別するは不合理なりと、

これは諸凡愚に對して我は教示せず」

(藏) || Len-Pahi Rnam-Par-Çes-Pa Zab-Cin Pira |

| S-Bon Thams-Cad Chu-Bo bShin-Du-hBab |

| bDag-Tu Rtog-Par Gyur-Na Mi-Rui Shes |

| hDi-Ni Byis-Pa Rnams-La Nas Ma-bStan ||

(梵) || Adāna-vijñāna-gabhīra-kṣmo |

ogho yathā vartati sarvabjō |

| bālā eśāmapī na prakāḡite |

moha iva ātmā parikarpayeyuh || (Triṅgikā, p. 34.  
by Sreyahn Levi)

識の緣 (Alambana) が別々の緣 (Pratyaya, 條件) に於て決定する如く、そは直接の條件(關係・緣)を謂はず、一切識を發生するに、一切識の直接の條件(緣)を認むるが故に、緣 (Avalambana, 攀緣の義) が緣(條件・關係)と會合せば、又かの直接の單獨の條件(緣)よりは二若は多識を生じて相違せざるべし。若し直接の別々の條件(緣)に於て決定なきが故に、諸五(識)は俱(起)に緣(攀緣)の條件(緣)と會合せば、また一(識)のみ發生するに至るも(以下原文)

「五(識)と俱(起)するにあらず」と云ふ。これは何の因證ありや。かるが故に緣(攀緣)あれば、五(識)俱を發生し、或は復發生せざるを認むるを要す、今これを説明すべし。

云何に意識は眼識等の諸識と俱に發生するや、或はまた彼等なくとも尙發生すべしと思惟するや。この故に、

(16) 「意に由て識を發生せしむるは、

|| Yid-Kyi(s) Rnam-Ces hByun-Ba-Ni |

常に於てなり、無想と、

| Rtag-Tuho hDu-Ces-Med-Pa Dan |

定(入平等)の二種と

| Snoms-Par-hjug-Pa Rnam-gNis Dan |

無心の睡眠と、悶絶とを除へ」。

| Sems-Med gNid Dan bRgyal-Ma-gTogs ||

と云へるを説明すべし。

(註) ①原文「唯識三十論」には *kyis* (由て) とあり。安慧原文と、調伏天の「唯識三十論疏釋」*Ku. LXI. 43a. p.* にも孰れ

も *kyi* (の) とあり。今「三十論」の原文に従ふ。

常に (*Sarvada*, *Rtag-Tu*) を云ふは、一切時の(意)なり。眼識等と俱と不俱と云へる假名なり。一般に起る此の(攀)縁の取除を始めとして、「無想」と「定(入平等)の二種」と、「無心の睡眠と悶絶とを除く」を云ふなり。そこに、

無想 (*Asañjñkā*, *hDu-Ḥes-Med-Pa* をば、無想心を有する諸天の中に生ずる心と心所との諸法を滅することなり。

定(入平等)の二種 (*Samāpatti-dvayā*, *Siñoms-Par-ijup-Pa-Rnam-g'Nis*) をば、無想と、滅盡定となり。そこに、

無想定 (*Asañjñkā-samāpatti*, *kDu-Ḥes-Med-Pahi* *Siñoms-Par-ijug-Pa*) をば、第三靜慮の食欲を離れ、上(第四禪以上)の食欲を離れずして、出離想の作意を先きとなすに由て、意識と、彼と相應する諸心所との總てを滅することなり。それを茲には無想定と名くべきなり。是に由て滅せらるゝが故に滅と云ふなり。(以下原文一九二右)。そは又意識と相應すると共に又未生のものを滅す(以下原文一九二右)。(これ)住位の住する場合の差異なり。かの定(入平等)は心に次で他心を生じ、不同の住位を得せしむるが故に定(入平等)と云ふなり。

滅盡定 (Nirodha-Samāpatti, hGog-Pahi Śhoms-Par-tjug-Pa) とは、無所有處 (Ci-Yan Med-Pahi Sitye-mChed) の貪欲を離れ、寂靜位の想を先きとする作意に由て、意識と、有煩惱の意と相應する總ての(想)を滅することなり。これ又無想定の如く、住位の住する場合の差異に假托せしなり。無心の睡眠 (Acittaka-middha, Sens-Med-Pahi gNid) とは、睡眠位は極重に由て壓迫せらるゝが故に、その有る限りは専ら意識は生ぜざるを無心とは云ふなり。

無心の悶絕 (Acittaka-mūrchānā, Sens-Med-pahi bKgyal-Ba) とは、忽然念起 (A-gantu-nābhi Shā-ta, Glo-Bur-Du Snañ-Ba) と、風と廣病と痰とに等しく、住位は不同に由て意識を生じ、かの總て不同のものを無心の悶絕なりと假托せしなり。これ等の五位を除いて、彼れの在らざる一切時に於て意識の起るを知るべきなり。是の如く無想等の識を滅す。かの無となれるものが後とより生ずるとき、何が故に彼等は死時を作らしめざるや、そは(意識)阿頼耶識の自體より發生し、彼(阿頼耶識)は又一切識の種子を有す。「總ての識轉に於て、我と法とを假托す。そは三種を」廣釋するに於て、三種を釋し了れり。(以下原文 一九二右)

若し彼れを我と法とに假托することに(由て)發生するものは、そは識の轉變そのものなり、かの識の轉變より離れば、我と法とは無なりと云ふ彼の決定を成せしめんが爲めに。



(17) 「識に於ける轉變なり、是れ

|| Rnam-Par-Çes-Pa(r) Gyur-Ba-ñDi |

分別にして、それに由て總ては、

| Rnam-Rtog-Ye-Te De-Yis Gañ |

かの分別なし、それ故に是れ、

| Rnam-bRags De-Med Des-Na ñDi |

一切は、唯、識なり」。

| Thams-Cad Rnam-Rig-Pa Tsam ||

と云へるを説明すべし。

(註) ①本頌第十七頌と Rnam-Par-Çes-Pa Gyur-Pa とあるに從ぐ。調伏天の「唯識三十論疏釋」Ku: LXI. p. 49b には識は

轉變す (Rnam-Par-Çes-Pa Gyur-Pa) となり。

識轉變の三種の直接の釋は、總て是れ分別なり。假托の意味の相は、三界の心と心所とを分別 (Vikalpa) と名づく。云何ならんば、

「妄分別とは心と心所とは

|| Abhūta-parikalpastu citta-caitās-tridhātukāñ ||

三界なり」。

| Yan-Dag-Ma-Yin Kun-Rtog-ñi, Sems Dan

Sems-Byun Kham-s-g-Sum-pa |

を釋するが如し。分別は三種なり。阿賴耶識 (Ālayavijñāna, Kun-g-Shi Rnam-par-Çes-pa) を具煩惱の意(識) (Kliṣṭa-manah, Non-Moñs-Pa-Can-Gyi Yid) を證轉識の自性 (Pravṛitti-vijñāna-svabhāva, jñg-pañi Rnam-par-Çes-pañi Rañ-bShin) に相應するものと共にして、是に由てかの分別の器と我 (Ātmā,

bDag) と、蘊と、界と、處と、色等の其等の實物はなし、是の故に「識は轉變す、是れ分別なり」と云はる。(これ攀縁なければなり。かの(緣、Alambana, dMigs-pa) は、是れなくして云何ぞ知ると云ふや。かの因は何であるとも、また聚合と矛盾することなくば、そは生すべし。他に於てはあらざるなり。

識 (Vijñāna) とは、幻影と乾達婆城、と夢等は、又(攀)縁中に發生す(以下原文。若し識の發生は(攀)縁の依屬ならば、是の如き幻影等は意味 (Artha, Don) なきが故に識は發生せざるなり。それゆへにかの先きの滅と同種の識より識を生ず、尙それなくとも發生するが故に、外境の意味(境)よりは(發生)せざるなり。異義(異境)に非ざるものに於ける諸分別は互に異なるを見し、一(物)は互に諸不同の主體となるは不可なり。それゆへに假托の自性 (Adhyāropita-rūpatva, Sgro-brtags-pahi No-Bo) なるが故に、分別の(攀)縁 (Alambana, dMigs-pa) なきを知るべきなり。「それに由て」とは、更に假托の邊を離れ、誹謗の邊を離るを欲するが故に。

「それ故に、是れ一切は唯識なり」(Denedam sarvani vijñāpti-matrakam) と云へるを説明すべし。「それ故に」と云ふは、「それに由てならば」となり。是の如く轉變の主體を分別するが故に、

「總てはかの分別なし」(Tedanam sarvam nāsti, Gan Rnam-Par brtags-Pa De-Med)

と(云へる意)なり。それに由てならば境なきが故に「一切は唯識なり」と(云へる)なり。「一切」と

云ふは、三界を無爲となり。「唯」(Mātrakam, Tsam)の語は、それより餘の境を遮斷せしむる名目なり。「パ」(Pa)とは(偈)語根の添補なり。若し「一切は唯識」のみにして、それより他の「作者」と、作となければ、「根本の識」は攝受せられざるにより、無作に於て諸分別は生すべしとは云何ぞ思惟するを得ん、この故に、

(18) 「識は一切種子なり、

|| Rnam-Āes Sa-Bon Thamas-Cad-Pa |

相互等の力に依て、

| Phan-Tshun-Dag-Gi dBan-Gyis-Na |

是の如く、是の如く轉變し行く

| De-Ltar hGyur-Bar-hGiro |

それに由て分別は彼々を生ず」。

| Des-Na Rnam-Rtlog De-De-Skyes ||

と云へるを説明すべし。それは一切法を生起する能力を有するが故に「一切種子」となり。識(以下 jāna, Rnam-Par-Āes-Pa) は阿頼耶識 (Kun-gshi Rnam-Par-Āes-Pa, 一切根本識の義) なり、(以下 三九) 左。或は識は一種子を有せざるものあるが故に、「一切種子」と云へるを説明せり。又識に非らざるものに於て、或者は一切種子を分別するに由て識と云ふなりと説明せり、復一語中に過誤あるが故に差異と差異の事を教示す、それは過失なし。

「相互等の力に由て、

|| Yaty anyonya-vaçād |

是の如く、是の如く轉變し行く」

— hi parīṇāmas tathā tathā ॥

と云へるに於て先きの阿頼耶の位置より他に轉變することは、(これ)轉變なり。「是の如く、是の如く」と云へる、はかの分別とか次に生起し能はざる位置とを得すると云へる名目なり。

相互の力 (anyonya-vaśād, Phan-Tshun-Gyi-dBan) と云へるに付て、是の如く眼等の識は、各自の能力をして整調せしめんが爲めに、隨轉 (Hing-Pa) のとき阿頼耶識は特殊の能力を有する轉變の因の(實體と)なるべし。かの阿頼耶識の轉變は、又眼等の識の因となるべし。是の如く相互の力に由てなり。何故ぞならば、かの二者を生ずるが故なり。阿頼耶識は他に由て攝受せられざるにより分別は彼の多種と、彼とを生起すなり。これ今の時に阿頼耶識より隨轉する識は、云何にして發生するかの其を教示するなり。「今」とは唯識は今の時滅して未來の時、云何にしてそは相應するかを教示せんが爲めに、(次の如き偈を)説明せんとす。

(19) 「業の熏習と、二取の、

॥ Las-Kyi Bag-Chags ḥDsin-g'Nis-Kye ॥

熏習と俱なるに由る。前の

— Bag-Chags-b-Cas-Pa(s) Sha-Ma-Yi ॥

異熟の盡きて、他の

— Rnann-Par-Smin-Pa Zad-Nas gShan ॥

異熟の生起するは是れなり」。

— Rnann-Sneḥ Skyed-Pa De-Yin-No ॥

功德(福)と、無功德(非福)と、不動心とは業なり(以下原本一九四右)。かの業 (Karma, Las) に由て未來の身を能く成せしむるに於て、阿頼耶識中に能力を生起する總ては是れ

業の熏習 (Karmāṅg-Vāsana, Ras-Kyī Bag-Chags) なり。

二取 (grāha-dvaya, hDsin-Pa gNis) ㄝㄝㄝ、「所取に於ける能取」 (Grāhga-grāha, gZun-Bar hDsin-Pa) ㄝ、「能取に於ける所取」 (Grāhaka-grāha, hDsin-Par hDsin-Pa) ㄝなり。そは識を離れて自存するが故に、住の所執の存在を餘分に愛著することは「所取の能取」なり。そは又識に由て分別し、了別し、確かに能取する總ては、これ「能取の能取」なり。會て發生せし能取と、所取の能取とに由て與へられたる彼の未來の種の所取と、能取の能取とを發生する種子は「二取の熏習」なり。そこに「業の熏習」の差異に由て異趣の身は不同となるべしとは、異別の種子が異別の芽(を生ずるが)如し。「二取の熏習」とは業の一切熏習は、云何に自引の身を生起せしむる(際)に諸住(熏習力)の俱起となるべし。譬ば種子の芽萌るとき水等(は俱起の縁となるが)如し。この故に或業の熏習あらざるも「二取の熏習」に由て執せらるゝが故に識は生起すと説かるなり。この故に「二取の熏習と俱なるに由る」と云へるを説明すべし。

「前の異熟の盡きて、他の

|| Ksine pūva-pipāke |

異熟の生起するは是れなり」。

| anyavipākam janayati tat ||

と云へるは、前世に於て積集せし業が此(世)に於て異熟を能く成就せしむるところの彼の總ては盡きてと云ふは、(そは)招引の時の間際に於て住止するが故に、業の薰習の力を具するに至るべし。その時(以下原文一九四左)かの「二取の薰習と俱なるにより」異熟は斷盡せられて、他の異熟はかの阿頼耶識そのものに生起す。阿頼耶識を除いては他の異熟なければなり。「前の異熟盡きて」といふは是に由て常の邊際を捨つるなり。「他の異熟を生起す」といふは、斷の邊際を捨つるなり。眼識等を除くとも阿頼耶識は存す、其者は一切種子なり。眼等の識にあらずと云ふは云何なる如きものを云ふや。訓誨と種とに由て存在するは現かなり。「世尊は阿毘達磨經中に宣給へり。」曰、

「無始の時の界にして、

|| Thog-Ma-Med-Pa'i Dus-Kyi dByins |

一切諸法の住止なり、

| Chos-Rnams Kun-Gyi gNos-Yin-Te |

彼れ有るが故に一切趣と、

| De-Yod-Pas-Na hGo-Kun Dan |

及び涅槃とを得るべし。」

| Mya-Nan-Las-hDas-Paṅai Thob-Par-hGyur ||

(梵) || Uktāni hi Bhagavat-Ābhidharma-sūtra |

| Anādi-kālika dhatuḥ | | sarva-dharma samāgrāyaḥ |

| Tasmān sati gatiḥ sarvā | | nirvāṇa ādhīyāno pi vā ||

(Triṇi gikā-vijāpti-karikā, by Sylvain Levi. p. 37)

阿頼耶識なくば輪廻に轉入し、又退轉することは不可なり。そこに輪廻に轉入するとは、他の同分に再生せしむることなり。退轉とは、有餘(涅槃)と共に、無餘涅槃 (Phun-Po Lhag-Ma-Med-Pahi Mya-Nan-Las-hDas-Pa) の界(因)なり。そは阿頼耶識より外にして、行の緣 (Pratyaya, Rkyen; 條件) に由て識(の發生すること)は不可なり。行の緣に由て識(の發生)なくば轉入も亦なかるべし。

阿頼耶識を承認せずに再生の識、若は行に由て全く汚染せらるゝ彼の六識聚は、行の緣(條件)より發生するなりと計慮するとも、(以下原本一九五右)、そは彼の總ての行は再生の識の緣(條件)に於ては謂ふべからず。其等は滅し已りて長く經過すればなり。聖者には無ければなり。「無」とは緣(條件)に於て(認むること)不可なるが故に、行は再生(結合)の識の緣(條件)に於ては不可なり。結合(再生)のとき、尙名と色とあり。或識(の緣)は(存)せずせば、そこには識其者は行の緣(條件)に由て發生すれども、名と色と(の緣)はあらずと云ふ、是は云何に正しきぞ。それ故に、行の緣に由て名と色とはあれども、識(の緣)はあらずと稱すべきなり。

識の緣(條件)に由て名と色(あり)と云ふは何ぞや。若し總て後時の緣(條件 Pratyaya)なりと云はゞ、かの結合(再生)の名と色より自性差異を轉變すとは何ぞや。是の如く(名色)其者は識の緣によりて發生するが故に、前にあらず、前とは行の緣に由て發生するが故に後にあらず。この故に行の緣に由て名と色とに轉變すれども、結合(再生)の識は餘支を分別するが故に何をか爲さん。それ

ゆへに結合の識は行の縁に由て發生するは不可なり。六識聚は行に由て全て汚染せらるゝとも、亦行の縁に由て識を(汚染する)は不可なり。そは何故に云ふや。識は異熟(Vipāka, Rnam-Par Smi-pa)の薰習(Vasana, Bag-Chags)と、同分因の薰習とを主體(我)中に發起する能はず、主體(我性)中の能作は乖理の故なり。又無間に發生する(識)中に(二種の薰習)は(發起すること)あらず。かの時それは發生せざればなり。未發生(Ma Byun-Ba)とは、無なればなり。又發生するとも尙あらず。そは彼の前の時に於て已に滅すればなり。無心の滅盡定等の時に於ては、行に由て全く汚染せらるゝ心は存在せざるが故に、識の縁に(Pratyaya)由て名と色とは無となるべし。彼の(名色)なきが故に、六處も亦無となるべし。従つて生の縁(條件)に由て老死に至るまで亦無となるべし。この故に輪廻に轉入することも無となるべし。それ故に無明の縁に由て諸行あり、それに由て汚染せる阿頼耶識の行の縁(條件)に由て識(の發生)あり。かの縁に由て結合(再生)のとき、かの名と色とは此理趣に於ては過失なし。又輪廻の退轉は阿頼耶識なくしては不可なり。輪廻の因は業と諸煩惱となり。又此の二者中に於て煩惱は上首なり。是の如く煩惱の力に由らば、業は、又(三)有を招引するに堪ゆるも、他(の力)に於てはあらず。是の如く招引せらるゝ(三)有は、又業と煩惱の力に由て「有」となるべし。他に於てはあらず。斯くて(煩惱は)上首なるが故に、煩惱は輪廻に轉入する根本(の因)なり、この故に彼等を離れば輪廻は亦退轉せらるべきも、他に於てはあらず。阿頼耶識な



くば彼等を離るゝこと不可なり。云何ぞ不可なりと云ふや。煩惱は現かに轉變し、若は種子のとき離るべしと計慮して、そこに現かに轉變を離るべしと云ふども、是れは謂ふべからず。それを離るべき道に住する（を要するが）故に、又種子のとき離るるも不可なり。（以下原本一九六右）

何處にても煩惱の種子の住止は、彼等煩惱を離れば、その時幫助（を除いて）又他の總てのものも合理的に承認すべからざればなり。云何ぞ幫助の心性は、煩惱の種子を有すると謂ふ、そは、かの煩惱の種子を有するもの（なるが故に）かの幫助となることは不可なり。煩惱の種子を離れざるもの、輪廻を退轉せしむることあらず。それ故に決定して阿頼耶識に於て、それより他の識と、俱生の煩惱と隨煩惱とに由て自己の種子を蘇生せしめらるゝが故に、薰習の汚染を承認すべきなり。

應に煩習力に従ひて隨轉を得するに至らば、因に於て轉變の差異を得する心より煩惱と隨煩惱との總てを發生す。彼等に由て種子は阿頼耶識中に住することは、彼と俱生の煩惱の對治（幫助）に由て除かるべし。それ故に彼の住止に於て又諸煩惱は發生せざるが故に、有餘（涅槃）の界（因）を得す。かの宿業に由て招引せらるるとき滅すべし。それより他の時と結合（再生）せられざるが故に、無餘涅槃の界を得すべし。業の存在を執すとも、尙諸煩惱を捨つれば、俱起せしむる因なきが故に、（三）有を能く成せしむる能はず。是の故に阿頼耶識存せば輪廻に轉入し、そして退轉せしめ得べきも、他に於ては能はざるなり。眼等の識より離れば、阿頼耶識の存在に於て、其者は一切法の種子

を有し、眼等の識には(有せ)ざるを決定して承認すべきなり。

廣詳なる觀察は「五蘊論釋」(Pañca-skandha Upanibandhā, Phun-po Lha-poñi ḥḡad-Sbyar)に於て知るべきなり。

(註) ① Vinīadeva の著「唯識三十論疏釋」Ku. LXI. p. 55b. 2田「たの廣詳の經とは、十座安禪 (Sthiramati, Blo-bKran)

の造りし五蘊論釋に依て知るべきなり。」

若し是等は唯識ならば、云何ぞ經と相違せざるや。諸經に據れば、(Svīyān Triṣoḷka-viñāpiti) (bhāṣyam, p. 59. 參照)

(一) 遍計 (Parikalpita, Kun-bKtag-s-Pa)

(二) 依他 (Paratantra, ḡShan-Gyi dBan)

(三) 圓成 (Parinispanna, Yon-sSu-Grub-Pa)

の三自性を説き給へり (Trayān svabhāvaṁ Uktān, No-Bo-Ñid-gSum ḡSuḡs-So)°。唯識性に於ては三自性を分別するも矛盾なし。云何に然るや、この故に。

(20) それ〜の分別に由て、

|| Rnam-Par-Rtog-Pa Gan-Gan-Gis |

それ〜の物を分別せらる

| dÑos-Po Gan-Gan Rnam-bKtag-Pa |

かれこそは遍計せらる、それゆ

| De-Ñid Kun-Tu bKtag-Pa-Yi |

自性なし、かれはなし。

— No-Bo-N'idi De De-Med-Bo ॥

と云へるを説明すべし。

(註) ①、②、原文 Rrag-Pa は bRrag-Pa の誤寫、今は本頌によりて訂正す。

内外の物 (Vastu, g'Nos-Po) を分別する差異に由て無邊の分別を教示せんが爲めに、「それ／＼の分別に由て」と云へるを説明すべし。

「それ／＼の物を分別せらるる」(Yad yad vastu vikalpyate, d'Nos-Po Gai-Gai Rnam-b'Rtags-Pa) 云ふは、内外の物にして、縱令佛の法に至るまで(分別せらるべき總てのものは)又「かれこそは遍計」の自性(なりと見るべきなり)爰に因證を説明して「かれはなし」(na sa vidyate, Nc-Bo-Ni-Med) 云へり。かの分別の境の物は總て是の如く自性 (Rai-b'Shin) なきが故に「無」なり。それゆへに彼の物は遍計の自性 (No-Bo-N'idi) のみにして、因と縁 (Rkyen) とに關係すれども自性はなし。是の如く一物と、かの「無」に於て相互に不相應なる多くの分別の起るを見る。かの單獨の物が、若はかの「無」に於て相互不相應なる多くの自性(を見る)は不可なり。それゆへに是等の一切は「唯分別」にして、かの意味は遍計の自性なればなり。又經によれば(以下原文)  
「須菩提 (Subhūti, Rab-h-Byor) よ、云何に諸の異生凡愚が現かに耽著するが如き諸法は無なり」と説き給へり。遍計の次に依他の自性を釋して、是の故に。

(21) 「依他の自性(を起す)は、  
|| gShan-Gyi dBai-Gi 'No-Bo-Nid |

分別にして、縁より發生す」  
| Rnam-Rtogs-Yin-Te Rkyen-Las Byum ||

を云へるを説明すべし。

分別 (vikalpaḥ, Rnam-Par-Rtogs-Pa) を云ふは、愛には「依他の自性」(paratan tra-svabhāva, gShan-

Gyi dBai-Gi 'Nos-Bo) を教示すべしなり。

「縁より發生す」(pratyayod-bhavaḥ, Rkyen-Las Byum) をば「依他」を言へる發生の因を教示すなり。そつに「遍計」(parikalpaḥ, Kun-Tu Rtog-Pa) をば、善々、不善々、無記の差異(に由りて)三界の心々、心所 (Tridhātukāḥ cittāḥ) なる。是の如く、妄分別 (Abhūta-parikalpas, Yan-Dag-Ma-Yin Kun-Rtog) は、心々、心所の三界なりを釋せらるが如きものなり。他の因を縁にによりて支配せらるゝが故に「依他」にして、生起 (Uṣpādyata, Skyed) を云へる名目なり。自 (bDag) より他の諸因縁 (hetu-pratyaya) に屬しつゝ生ずるを教示せんが爲めなり。「依他」(pratantraḥ) は釋し了れり。

圓成 (pariniṣpannaḥ, Yois-Su-Grub-Pa) をばは何なるものを云ふや。この故に。

「圓成は彼に於てす、前は、  
| Grub-Ni De-La Sha-Ma-Po |

總て常に無となるべし」。  
| Rtag-Tu-Med-Par Gyur-Ba Gan ||

と云ふを説明すべし。

不變 (a + vikāra, Mi-h-Gyur-Ba) なるが故に圓成 (parinispanna, Yohs-Su Grub-Pa) なら。「彼に於てす」(tasya, De-La) の如きは「依他に於て」(paratantrasya, gShan-Gyi dBa'i-Po-La) のなり。「前は」(Purva, Sha-Ma-Po) の如きは「遍計」(Parikalpita, Kun-bKtags-Pa-'Nid) の如きなり。かの分別 (Vikalpa, Rnan-par-Rtog-Pa) に「所取」(grāhya, bZai-Ba) の「能取」(grāha, hDsin-Pa) の物 (bhāvah, dNos-Po) を(假托するが故に)遍計なり。是の故に「彼に於て」は所取と能取となけれども、遍計の故に遍計と云はるなり。かの能取と、所取と、かの依他とは常に一切に於て長く離るゝは是れ圓成の自性 (Svabhāvah, No-Bo-'Nid) なり。

(22) 「この故に彼れこそは依他より

|| Dehi-Phyir De-'Nid gShan-dBani-Las |

異にも非ず、不異にも非ず」

| gShan-Min gShan-Pa Min-Pa-Min |

(註) ①本頌と De-Phyir なる。

②本頌と gShan-Ma-Yin-Paḥan Min なる。 Vinitadevas. LXI. p. 58b と gShan-Ma-Yin-Paḥan Ma-Yin なる。

「この故に彼れこそは」(Aṭa eva sa, Dehi-Phyir) の如きは「是の如く遍計の自性は、依他と共に離るゝは、圓成にして、離る (Rahitātā, Bral-Ba-'Nid) の法性 (Dharmatā, Chos-'Nid) なり法性

は法より異 (nānyā, gShan) と不異 (mānanyā, gShan-Ma-Yin) となるは不合理なり。圓成とは依他の法なり。その故に依他より圓成はまた異にも非ず、また不異にも非ずと了解すべきなり。若し圓成は依他より異ならば、斯くては遍計に由て依他は空とならざるべし。云何にして不異なるか。斯くては又圓成は如實の縁 (Aīambanah, dMigs-Pa) とはならず。(云何とならば) 依他に從ひて一切によつては煩惱の主體なければなり。是の如く依他は又一切によりて「煩惱の主體」(Kīega-ātmatkāṅ, Non-Moṅs-Paṅi bDag-Ūid) とたらずして、圓成より不異なるが故に、圓成に同じきなり。

「無常等の如しと稱す」

— Mi-Rtag-La-Sogs bShin-Du bKjod —

「異にも非ずと云へる語の餘なり。譬へば無常性 (anityatā, Mi-Rtag-Pa-Ūid) と、苦性 (duḥkhatā, Sduḡ-bSnaI-Ba-Ūid) と、無我性 (na + atmata, bDag-Med-Pa-Ūid) との無常等より異にも非ず、また不異にも非ず。若し諸行より無常は異ならば、斯くては全く諸行は無常とならざるべし。云何にして不異ならば、斯くては又諸行によりて無(の自性)となるべし、(猶)無常の如し。是の如く苦等に於ても亦説明せらるべきなり。若し依他に於て能取と所取となくば、そは云何ぞ所取と不所取とに於て(亦彼は)存することを云何に知るや。この故に(以下原文)。

「此を見ずしては彼を見るべからず。」 — De Ma-nThon-Bar De Mi-nThon —

「彼を見ずしつ」 (nādris'te smin, De Mi-nThon) と、འདྲེན་པ་མེད་པོ་ 圓成の自性 (parinisṅpanna-svabhāva)

なり。「彼は見るべからず」(sa[ra]+driçyate, De Mi-m-Thoi) 云ふは、依他の自性なり。出世間の智慧は「無分別」(nirvikalpa) に由て見らるべきも、圓成の自性は(見る)べからずとは、無分別と現(量)とに於ては(見る)べからずとなり。かの(出世間智)の比量に於て得する清淨なる世間は、出世間智の行境なるが故に、異別の智を以ては依他は取すべからず、この故に圓成は見るべからず、依他を見るべからず、出世間智の比量に於て得する智慧を以ては見るべからざるには非ず、無分別に轉入する能取によれば、即ちかの此量に於て得する智慧を以てせば、一切法は幻影と、幻想と夢と、蜃氣樓と、山響と、水月と、變化とに等しきを見るなりと説き給へるが如し。「法」とは爰には依他に積められたる諸のものを耽着す。「圓成」とは虚空の如きものにして、智慧一味なり、即ち無分別智に由ては、一切法は虚空の輪に等しきを見るなりと説き給へるが如し。そは依他の諸法の眞如 (De-bshin-zid) のみを見ればなり、若し依他は事物 (dravya, Rdzas) の存在なりとせば、應に經に據るに、

「一切法は無自性なり、  
 無生なり、無滅なり」。

と教示すと云ふも、そは矛盾なし、是の故に。

|| Chos Thams-Cad-Ni 'No-Bo Med-Pa |

| Ma-Skyes-Pa Ma-h-Gags-Pa ||

(23) 「自性は三種に由て、

|| 'No-Bo-'Nid-Ni Rnam-g-Sum-Gyi |

三種の無自性を(立つ)

l No-Bo-Nid-Med Rnam-gSum-La l

密意によりて一切諸法は、

l dGons-Nas Chos-Rnam-Thams-Cad-Ni l

無自性なるを教へらる」

l No-Bo-Nid-Med bStan-Pa-Yin ll

自性 (svabhāva, No-Bo-Nid) は三(種)のみ、四(種)はなしを教示するが故に數を示すなり。各々の相の存在する如く轉變 (hGyur-Ba) するが故に自性なり。

「三種の無自性」(Trividham-nihsvabhāvātā, No-Bo-Nid-Med-Pa Rnam-Pa gSum) は左の如し。

- (一) 相の無自性 (Laksananih-svabhāvātā, mtSham-Nid No-Bo-Nid Med-Pa)
  - (二) 生の無自性 (Utpattinih-svabhāvātā, Skye-Ba No-Bo-Nid Med-Pa)
  - (三) 眞諦の無自性 (Paramārthānih-svabhāvātā, Don Dam-Pa No-Bo-Nid-Med-Pa)
- 一切法とは、遍計の、依他の、圓成の主体 (Ātmakāh) なる。

今は三自性 (Trividhasya svabhāva) の彼の無自性の總じてを教示せんが爲なり。

(24) 「第一は相に由て、  
|| Dai-Po-Pa-Ni mTshan-Nid-Gyi(s) |

無自性なり、他のものは又、  
l No-Bo-Nid-Med gShan-Pa Yai l

そは自其者を發生せざるが故に、  
l De-Ni Rai-Nid Mi-hByun-Bas l



無自性は他のものなり」。

|| No-Bo-Ńid-Med gShan-Yin-No ||

(25) 「彼は法の義の最勝なり

|| Chos-Kyi Don-Kyi Dam-Pañān De |

是の如く彼は亦真如なり」

| hDi-Ltar De-bShin-Ńid Kyan-De |

と云へるを説明すべし。

「第一は」(Prathamah, Dan-Po) とは、遍計の自性なり。彼は相に由て無自性にして、かの相は假托なればなり。色の相とは、色に於ける存在なり。受 (Vedanā, Tshor-Ba) の相とは、嘗受なりと云へるが如し。彼等は自の自性なきが故に、虚空の華の如く自の自性なし。

「他のものは又」(Sparah punah, gShan-Pa Yan) と云ふは、依他の自性となり。彼は幻影の如く、他縁 (Para-pratyaya) に由て生ずるが故に、「自の物」(Svayam-bhāva, Rat-Gi dŃos-Po) なりなり。是の如く又云何に顯現するとも、それは無生 (an-utpādam, Skye-Ba-Med) なり。この故に生は無自性なりと云ふなり。「彼は又法の義の最勝なり」。「是の如く彼は亦真如なり」と云ふに於て、最勝 (Parāna, Dam-Pa) とは、出世間の智慧にして、無上なればなり。かの義は最勝なり。また虚空の如く、一切に於て一味と、清淨と、不變との法を圓成して(以下原文)最勝義と名けらるなり。是の如くかの圓成の自性は、依他の主體の一切法の勝義にして、かの法性あるに由る。この故に圓

成の自性は勝義無自性にして、圓成は無物(無實體)の自性なればなり。何ぞ勝義のみに由て圓成を説明し得るや。(そは)説明すべからず、「彼は亦真如なり」と。

「亦」(api, Kyai)の語は、真如の語に於ける説明は、單なる(説明にては)なすべからず、法界の法門に屬する限り、そは一切に於て説明せらるべきなり。

「一切諸時に於けるも亦真如なり」 — Dus Rnams-Kun-Na De-b-Shin-'Nid |

とあるが故に、そは真如なり、是の如く異生と、有學と、無學との諸時の一切時に於て是の如く、他に於てはあらざるが故に、真如と云ふべきなり。何ぞ真如の如く唯識もまた圓成性なるや、果た唯識と異なるものなるかを考ふる、この故に、

「彼は即ち唯識なり」 — De-'Nid Rnam-Par-Rig-Pa Tsam |

とは異なるを説明し、眞に清淨なる相を了解するが故なり。即ちかの時、彼のみを見るが故に、(唯識の)名に於てかの心を住せしむることあり。名に於て住するが故に、了別(Rnam-Rig)に於て緣(dMigs-Pa)を離るべし。かの修習(dhāvanā)の因に由るとき無緣の因に觸れ、一切障より解脱す。その時自在を得すべしと釋するが如し。「彼は即ち唯識なり」と云へる此語に由て顯かに分別を説明せり。若し是等は唯識ならば、耳、鼻、舌、(以下原文)身にて色聲香味觸を取すべしと思惟す。かの思惟は何より生ずるやを考ふるに、是の故に。

(26) 「乃ち唯識性に於て、

|| Je-Srid Rnam-Rig Tsam-Nid-La |

未だ識に住せず、

| Rnam-Par-Ces-Pa Mi-g-Nas-Pa |

その間、二種取の、

| De-Srid hDsin-Pa Rnam-gNis-Kyi |

隨眠は退轉せず」。

| Bag-La-Nal-Ba Mi-Idog-Go ||

と云へるを説明すべし。

(註) ① 「唯識三十論」には hDsin-Pa gNis-Kyi Bag-La-Nal とあり。

② 同論には De-Srid Rnam-Par Mi-Idog-Go とあり、意義に於て更に異なるなし。

凡そ復業の薰習は二取なれども、薰習と共に前の異熟の盡きて、他の異熟の生起すること是れなりと云へる此説明の詰責と、不離とは云何なるものと云ふ。この故に、

「乃ち唯識性に於て

(yāvad vijñapti-mātrave)

未だ識に住せず」

(vijñānaṁ nāvasthau)

と云へるを廣説すべし。

畢竟心の法性は唯識なりと云はるゝが故に、「未だ識に住せず」所取 (grāhya, gZun-Ba) と、能取 (grāha, hDsin-Pa) とを縁する行爲に至るなり。

二取 (grāha-dvayam, hDsin-Pa gNis) とは所取の能取と、能取の所取となり (能所二取は原本 p. 194a. 参照)

隨眠 (anuṅgaya, Bag-La-N'nal) とは、未來の二取を生せしむ爲めに、彼等の阿賴耶識(根本識)に種子を托するなり。畢竟無二の相は唯識に於て融合の心に住せずば、その間二取の隨眠は退轉せず、未斷と云へる名目なり。此に於て外境の緣 (Upalambha) を斷せずば、内の緣もまた斷すべからざるを教示せらる。この故にかの(有情は)之を考ふるに、我が眼等を以て色等を取ると思惟す。今はこれを説明すべし。意味 (artha, Don) を離るゝ唯心を緣すれば、何ぞ心の法性に住するや。曰、(説明)すべからず。

(27) 「是等は唯識性なりと云ふ  
 〓 Di-Dag Rnam-Rig Tsam-N'id Ces I

そは是を思惟するに所緣に由て  
 I De-hDi Sñam-Du dMigs-Nas-Su I

何ものも適當に前に置くとも  
 I Ci-Yañ Luñ-Ste mDun hJog-N'a I

そは唯(識)中に住せず。〓  
 I De-Ni Tsam-La Mi-g'Nas-So 〓

そは又現かに慢を有するものは、總て唯聞に由て自己は唯識に如實に住すと思惟する彼の能取を除かんが爲めに、

「是等は唯識性なりと云ふ  
 〓 Vijñāpti-mātram evedam ity,

そは是を思惟する所緣に由」  
 api hyvupalambhatah 〓

と云へるなを説明すべし。

「是等は唯識性なりと云ふ」とは、意味 (artha, 境) を離れて、外界の意味なしと云ふ、是の如き所縁 (Upalambha, dMigs) は能取と相を作ると云へる名目なり。

「前に」 (agrata, mDun-Du) とは眼前にの(意)なり。「置くとも」 (sthyapyan, hJog-Na) と云ふは、應に聞きつゝ意を以て定むとなり。瑜伽行の縁は多種なるが故に、

「何ものも適當に」 (kimcit, Ci-Yan-Lun)

と云へるを説明すべし。或は、骸骨、或は冒険、或は腐敗、或は蠶、或は徽等(の如し)となり。

「それ唯(識)に住せず」 (Tan + matre-nāvatiśhate, De-Ni Tsam-La Mi-gNas-Pa) とは、識の縁 (Upalambha, dMigs-Pa) を断せしむるが故なり。時には識の能執を断じ、心の法性に能く住すべしと云ふ、この故に。

(28) 時に智に由て諸縁に(於て)は、  
|| Nam-Shig Ces-Pas dMigs-Pa Rnams |

縁すべからず、その時に於て  
| Mi-dMigs De-Yi Tshe-Na-Ni |

唯識に住す  
| Rnam-Par Rig-Pa Tsam-La gNas |

所取なき故に、それは能取もなし  
| gZun-Ba-Med-Pas De hDsin-Med ||

と云へるを説明すべし。

(註) 原文 *Dehi* は *De-Yi* の誤。「唯識三十論」の原文も *Dehi* とあれど義は同じければ茲に訂正す。

總ての時、教(法等)を縁すること、訓誨を縁すること、(*DMigs-Pa*) 色聲等の末(頃)を縁すること、は又可なり、智を以て心より外(境)を縁(意識)せず、見ず、取せざるが故、に現かに耽着することなく、意義もまた如實に見る。恰も盲人の如きにはあらず、(以下原文)。(二〇〇左) かの時又識の能取を離れ、又自心の法性に住す。この事に論證を説明して

「所取なきが故に、それは能取もなし」。  
— *grahābhāve tadagrahāt* —

と云へるなり。(是の如く)所取あらば能取に轉ず、所取なくば、(能取)あらず。(この故に)所取なくば能取なきを覺るべし。されど單に所執なきものを(覺ること)なし。斯くて所縁と、能縁とに於て無分別なるが故に、平等にして出世間の智を發生し、所取と能取とを現かに耽着する隨眠を離れ「又自心の法性に心を住すべし」(*Svacitta-dharmatāyam ca cittameva sthīlān bhavati*)

(註) ①原文 *szugs-Ba* は *szun-Ba* の誤寫なり。

若し是の如く「唯識性」(*Vijñaptimātrata*)に心を住せしむ、その時(かの心は)云何に云ふや、この故に。

(29) 「彼は不可思議なり、縁すべからず

|| De-Ni bSam-Med Mi-dMigs-Pa |

それは出世間の智なり、

| hJig-Rten hDas-Pahi Ye-Ces-De |

住止もまた他に轉ず

| gNas-Kyan gShan-Du Gyur-Pa-Ste |

二取の劣住も捨つる(に由る)なり」。

| gNas-Nan Len gÑis Spais-Pas-So ||

(註)

①原文及び Vinitadeva の「唯識三十論疏釋」p. 66a. には Sems-Med (無心) とあるが、梵本の Acintita (不思議) とあるに據りて bSam-Med (不思議) に改訂す。Vinitadeva は總て Sems-Med の原文なりに釋してある。これは恐らく安慧の「唯識三十論疏」(p. 66b.) の原文が最初より Sems-Med となりておいたが爲めである。

(30) 「彼こそ無漏の界なれ

|| De-Ñid Zag-Pa-Med Dan dByinis |

不可思議なり、善、堅固なり

| bSam-Mi-Khyab, Dan dGe-Dan bRtan |

彼は安樂なり、解脱身なり

| De-Ni bDe-Ba Rnann-Grol-Sku |

大牟尼の法と名けらる」。

| Thub-Pa Chen-Po Chos Shes Bya ||

(註)

①原文 Med-Dan-dByinis は Vinitadeva's(p. 66a) には Med-Pahi dByinis とあるに據りて改訂す。

此二頌に由て唯識性に入る融合の見道に依り、益々進み行きて完全なる結果を示す。そこに能取の心なく、所取の意義を縁すべからざるが故に、

「彼は不可思議なり、縁すべからず」(Acinto' nupalambho' Sau) と云へるなり。世間の咨議に於てはなすべからず、(世間の) 集もなく、無分別 (nirva-kalpa) にして、世間より相違するが故に、  
 「それは出世間の智なり」(jñānam lokotarani ca tat) と云へるなり。この智の次に「住轉」(Āgraya-parāvṛitti, g<sup>N</sup>as-Gyur-Pa) を云へんが爲めに、

「住止もまた他に轉ず」(Āgrayasya parāvṛitti) と云へるを説明すべし(以下原文 二〇一右)

「住止」(Āgraya, g<sup>N</sup>as) とは、爰に「阿頼識賴は一切種子」(Sarva-vijākam-ālaya-vjñānam) と(共)なりとなり。かの「轉ず」(Parāvṛitti; Gyur-Pa) とは、かの劣住と、異熟と、二の薰習の物(實體)(dvaya-vāsana-bhāva)の退轉に於て業に適當なるものと、法身(Chos-Kyi-Sku) と、不二の智の實體 (Bhāva, dNos-Bo) とに轉ずるとなり。又かの「住轉」を捨つるに由て「得らるべし」と云ふ。この故に、

「二取の劣位を捨つる(に由る)なり」(dvidhā-dhaushtulya-hāntiān) と云へるを説明すべし。

「二」は煩惱障 (Kdeçū-varāna) の劣住取と、所知障 (jeyā-varāna) の劣住取となり。

「劣住取」(dhaushtulyam-āgraya) とは、住の業に不適當なるものなり。そは又煩惱(障)と、所知障との種子なり。又かの「住轉」は、聲聞等に存する劣住取を捨るに由て得らるべしとは何ぞや。「解



脱身」(Vimukti-kāya, Rnam-Grol Sku) と云へるを説明せり。

菩薩に存する劣住取を捨つるに由て得らるべしとは何ぞや。

「大牟尼の法と名けらる」(Dharmakhyo yain mahāmuni) と云へるを説明せり。

二種障を捨つる特殊に由ての「住轉」は、「有上」と「無上」とを教示するなり。爰に於ける偈頌は取の智障は二(種)なるも、相性なりを知るべし。煩惱の種子と、一切の種子となり。其處に於て相互に結縛するなり。「一」と云ふは、聲聞と菩薩となり。前は煩惱の種子なり、後は二障種子なり。それ等を伏滅するに由て一切智を得せらるべし。「彼こそは無漏の界なれ」(Se eva na gṛavo dhātur) と云ふは、(以下原文、二〇左)、「住轉」の自性の無漏界なりと云はれ、「劣住取」は無ければなり。

一切漏を離るが故に無漏なり。聖法の因なるが故に界なり。「界」なる語は、此には因の義なり。

「不可思議なり」(Acintayahi, bSam-Mi-Khyab) とは辯論の境界にあらず、各自に由て知り、無比譬なればなり。「善」(Kueala) とは、清淨の緣 (Abalam bana, dMigs-Pa) と、安樂と、無漏法の自性あるが故なり。堅固とは、常と不盡との故なり。「安樂」(Sikha, bDe-Ba) とは、常性の故なり。總てかの無常なるものは苦なり。是は「常」(vityani, Rtag-pa) なり、この故に安樂と云ふなり。煩惱障を離れば諸聲聞の解脱の身なり。かの「轉住」の相とは「大牟尼の法の身なり」と云ふ。(十)地と到彼岸とを修習して煩惱障と、所知障とを離るに由り、「住轉」を如實に得するが故に、大牟

尼の法の身と云ふなり。輪廻に全て去かしめず、是に由て煩惱なく一切法に自在を得するが故に、「菩薩の法の身」とは云ふなり。「大牟尼と名けらる」とは、牟尼の最勝を具するが故に、覺者世尊は大牟尼なり。

(註) ①「身口意の三業に最勝の能力を具するが故に世尊を大牟尼と名け」と Vinītaeva の「識唯三十論疏釋」p. 62b. にあ

り。

「三十頌の疏」は阿闍梨耶安慧 (śāhiraṃatī, Bi-ob-Rtan) に依て造られ、完結す。

印度の律師勝友 (Jinamitra) と戒主覺 (Cīendrabodhi) と、大奏譯官、ワンテテ・イシデー (Yande Ye-Ces-Sde) との共譯、允刊なり、(終)。

(註) ②梵文 Trīṃ Śikṣa-vijñapti-bhāṣyaṃ の卷末と Kṛitā-acārya-śāhiraṃatīh と 𑖦𑖳𑖜𑖳 (Sylvaṃ Lavi 刊本による)。

(昭和二年二月二十七日夜譯)

西藏傳安慧造・唯識三十論疏 (完)

西藏傳・唯識三十論の正誤表 (前號)

誤

正

P 132, 3行	我と法とに於ける假托は	我と法とに假托することは
134, 4,	我愛と想	我愛の想
135, 3,	遍計	遍行
136, 4,	持恨	恨
183, 9,	書きて	盡きて
140, 9,	亦是の如し	亦真如なり
142, 3,	住	住止